

る。

また、中ほどに

「夜は更けたり、雪は霰と交り霰は雪となり降りつ止みつす。灘山の端を月はなれて雲の海に光を包めば、古城市はさながら乾ける墓原の如し。山々の麓には村あり。村々の奥には墓あり、墓は此時覚め、人は此時眠り、夢の世界にて故人相まみえ泣きつ笑つす。」

と、ある。冬の夜の町の情景である。

「下」のはじめの方に

「雪の夜より七日餘り経ちぬ。夕日影あざやかに照り四国地遠く波の上に浮びて見ゆ。鶴見崎の辺真帆片帆白し。川口の洲には千鳥飛び。」

とある。葛港の夕刻の景色である。また

「醍醐（代後）の入江の口を出る時彦岳嵐身に滲み、願れば大白の光漣に砕け、此方には大入島の火影早きらめきそめぬ。」

とある。佐伯湾内の夜の風景である。（おわり）

表紙解説

神内釈迦堂跡石幢について

直川村神内釈迦堂跡にあり県指定文化財である。天文十八年（一五四九）室町後期の造立で、高さ二、二六尺あり積重ね式、基礎の納穴に塔身が安定して建てられている。塔身は普通六角、八角であるが、この塔は四角で、中央龕部、笠も四面である。龕部四面の各面を二区に分け、二仏を浅い浮彫りにして八仏を配している。石幢は六地藏が本体で全く特殊な形式である。思うにこの施主は孝心深く、裏面に亡父母を刻み、地藏菩薩の加護を祈って供養したものであろう。笠は露盤に水煙を陽刻し四注降棟で、軒先に榑木鼻を各個正方形に刻んで見事である。

前面の銘文

謹奉造立六地藏一基

盛嶽左京助貞則

為右現世安穩後世善処也

其時天文十八年己酉九月二日施主敬白

（『直川の文化財』より）